

センター後援行事

第3回 「教えて考えさせる授業」セミナー

報告者 市川 伸一(教育心理学コース 教授)
実施日 2010年8月11~12日
於 赤門総合研究棟A200教室

「教えて考えさせる授業」セミナー(略称 OKセミナー)は、全国から「教えて考えさせる授業」実践者・研究者が集まる機会として実施されている。第1回(2008年)は箱根、第2回(2009年)は熱海で開催され、今回は第3回にあたる。定員60名のところを80名に拡大し、北は北海道、南は沖縄県まで、全国各地から多数の参加者を得て盛会のうちに終了した。

ちなみに、主催の「教えて考えさせる授業」研究開発ネットワーク(代表 市川伸一)は、明確なメンバー制をとる団体ではなく、メーリングリストで情報交換をしつつ、年に一度のセミナーを開催するというフレキシブルな非営利組織である。

当日の内容としては、第1日目の午後に、「教えて考えさせる授業」についての概説、三面騒議法(教育研究交流会の報告を参照)による授業ビデオの検討、理解深化課題についてのパネル討論が行われた。第2日目の午前中に、担当者もちよつた授業案について発表し、それを三面騒議法によって検討するという試みを行った。

三面騒議法を授業案検討にも適用するというのは初めての試みであったが、中学校の数学、英語、小学校の算数、社会の小グループ討論と、発表、全体討論とで、たいへんな盛り上がりを見せた。参加者へのアンケートにおいても、全国から集まつた初対面の教員同士が、教科や校種を超えて十分な議論ができたことへの驚きや充実感を述べた回答が多く見られた。

以下では、概説として述べた内容で、のちに『指導と評価』(図書文化)の2010年12月号に掲載された小論を抜粋する。

「教えて考えさせる授業」を展望する

「教えて考えさせる授業」とは

かつて、偏差値教育と言われた「教え込み・詰め込み」の時代、1990年代の「ゆとり教育」の時代、そして2000年前後の学力低下論争を経て、教育界はいま新しい局面にはいっている。その中で、「習得と探究」、「教えて考えさせる」といったフレーズが2005年以降、中教審答申の中で幾度かとりあげられるようになり、2008年3月に告示された学習指導要領にもつながって浸透しつつあるのは、ありがたいことだと思っている。

私自身がこれらの言葉を使いだしたのは、2001年ごろであり、学校や教育委員会での講演、中教審の会合、教育雑誌の記事などでたびたび用いてきた。ここには、1990年代、とくに小学校で行き過ぎの感があった、「自力解決」、「問題解決」、「指導より支援」という方針の授業への警鐘であるとともに、詰め込み教育に戻ってほしくないという思いも込められていた。

図1に表したように、目標となる知識や技能を身につける「習得サイクルの学習」と、自らの興味・関心に応じて課題を設定し、それを追究する「探究サイクルの学習」の双方が、車の両輪として重要であることを押さえてほしかった。その上で、習得の授業においては、「教師の説明」「理解確認」「理解深化」「自己評価」という4段階ですすめることを授業設計の原理として提案したのが「教えて考えさせる授業」である。

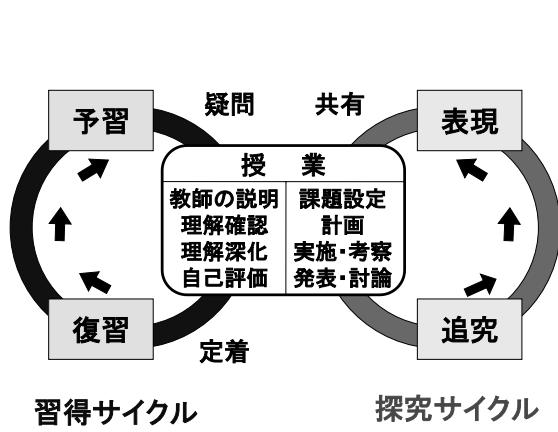


図1 習得の授業としての「教えて考えさせる授業」

けつして、授業のすべてをこの原理で行うべきであるという主張ではないのだが、そう受け止めて批判する教育関係者や、「教えて考えさせる」というフレーズ自体に反発する教員もいるだろうということは承知していた。1990年代に、「教える」という言葉(そして行為)は、極めて悪いイメージをもたされた。教師の役割は教えることではなく、「学びの支援だ」というしだいである。とくに、問題解決型の教科といわれる算数・数学や理科ではそれが強かった。これは、私から見ると、探究型の授業スタイルを無理やり拡張して習得を図ろうとする、無謀な教育論に思えた。

個人差の大きな公立の学校で、「先取り学習をしている子どもに足踏みさせない」、「学力の低い子どもも、基礎的なことが理解でき、高いレベルの問題解決や討論に参加できる」。そんな魔法のような方法があるのか、と思われるかもしれないが、「教えて考えさせる授業」は、まさにそれを正面からめざしている。それは、すべてを自力解決に委ねるのではなく、教科書に解説されていることや、答えの出ている例題はいわゆる「受容学習」として教えた上で、それを理解確認し、さらに、理解深化で発見的な問題解決学習に取り組むという、シンプルな原理でこそ可能になる。

「理解」を大切にした授業

上記の4段階を意識した授業展開になっていることが、「教えて考えさせる授業」の定義ともいえる基本的な特徴である。すでに述べたように、「未習内容を教えてしまうなど、とんでもない」という反発がある一方、「それはあたり前だ。とくにやっている」という意見もよくある。確かに、教師が解説し(つまり、教えて)、問題を解かせる(考えさせる)というのは、昔からよく見られる授業スタイルである。しかし、教師が解説したあとで、それが本当に生徒に理解されたのかという「理解確認」や、授業が一通り終わったあとに、何がわかり、何がわからなかったのかを「自己評価」として行っているのは、まず見たことがない。授業中の表情や発言があまり豊かでなくなる中学校や高校で、教師が生徒の理解度を確認するのは、いきおいテストのときだけになってしまい、日々の授業で教師が生徒の理解度をチェックする機会や、生徒自身が自分の理解度をモニターするような機会はほとんど設けられていないのが実態ではないだろうか。

「教えて考えさせる授業」の背景にあるのは、私自身が研究室で行ってきた子どもへの学習相談活動(「認知カウンセリング」と呼ばれる)と、認知心理学の理論である。相談に来るのは「授業がさっぱりわからない。家で勉強してもわかるようにならない」という子どもたちだ。とくに、小学校の高学年くらいから、内容が高度で、学習内容も増えてくると、「わからない」という悩みが急増する。私たちが大切にしたいのは、「理解」にはならない。理解できなければおもしろくない。理解できなければ、すぐ忘れてしまう。理解できなければ、応用的な問題も解けない。勉強の苦手な子どもにとっては、教師の説明がわかるだけでもまず素直にうれしいものだ。それを、「人に教えてもらってわかるのは、受身の学習だ」などと言わず、まず認めた上で、それをもとに自分で考える課題に取り組むという、ごく自然な考え方方に立っている。

学校現場からの声

「教えて考えさせる授業」は、4段階に沿って授業計画を立てることで、「習得目標は何か」「何をどう教えるか」「理解状態をどう診断するか」「より深い理解のためにどういう課題を設けるか」「自己評価はどうであり、次の授業にどう生かすか」がいやでも意識される。これが、初任者でも授業が組み立てやすく、ベテランならさらに奥の深い授業になるといわれるゆえんである。また結果として、子どもからは、「よくわかる」「やりがいがある」「おもしろい」と言われる授業になり、意欲も向上することになる。

『指導と評価』の連載では、中学校の先生方が、そのような授業の様子を描いてくださっている。小学校については、すでに実践も多く、実践事例集も出版されているので、この報告は貴重である。中学校の場合、学校で取り組むとなると全教科での体制を作ることとなるので、導入のしきいは高い。しかし、「教えて考えさせる授業」は、教科を越えた枠組みであるため、実践校では、導入をきっかけに、教科を越えて指導案検討や授業後の協議会で活発なりとりができるようになったという声をよく聞く。とくに、教師の説明のしかたや、理解確認のしかたには、教科を越えて使える指導技術があり、それがお互いに参考になることが多いという。また、理解深化課題も、教科や校種を越えてアイデアを出し合うことが、お互いの指導レパートリーを広げることにつながっているという。

私自身が書物やデモ授業で紹介する例が、算数・数学や理科が多いために、「自分の教科は、教科の特質上合わない」とか、「できる単元が限られている」とおっしゃる先生方もはじめは多い。連載の中で、「結論からいえば、適さない単元はない。とくに、先に教えるというスタイルは、基礎・基本の習得という点ですべての授業に適用したほうがよいと言える」(第2回、理科の松本圭代教諭)、「新しい表現を教え活用させるという英語科の特性から考えると、基本的にどの単元でも実践できるはずである」(第3回、水岡彩教諭)、「3年間の研究を終えてはっきりして

きたことは、『教えて考えさせる授業』の考え方は、国語科においても大変有効だということである」(第4回、的場教諭)という意見が現場の実践者から出されたことの意味は非常に大きいし、ありがたいことである。

「教えて考えさせる授業」は、公開研究会のときだけに行う授業ではない。あくまでも、「普段着の授業」をめざしたものである。同時に、研究会でもまったく見劣りのしない授業になりうる。教師の教える工夫の先にある、生徒たちのわかる喜び、高度な問題解決への取り組み、協同学習への意欲的な参加などを見ていただければ、これが授業のオーソドックスな姿であり、原点であることがわかつてもらえるであろう。今後のさらなる展開に期待したい。

(www.p.u-tokyo.ac.jp/lab/ichikawa/ok-toppage.html)